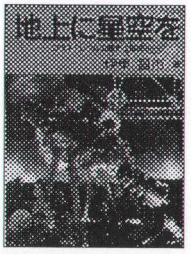

「地上に星空を ープラネタリウムの歴史と技術ー」

伊東昌市 著

裳華房，224ページ，1500円＋税

解説書

お薦め度
☆☆☆★★

日本はプラネタリウム大国である．数ではアメリカ合衆国に次ぐが，施設規模や設置密度では勝っている．また，200以上のプラネタリウムが常時開館しており，これは水族館と動物園をあわせた160をしのぐ．総観覧者数も年間で数100万人に達するだろう．電話帳にも「プラネタリウム」の項目があるくらいだ．日本は，世界一プラネタリウムが身近な国といって間違いない．

ところが，日本語でプラネタリウムについて書かれた本は意外と少ない．評者が知る限り，現在入手可能な市販書は3冊である．しかも，本書が出版される前はわずか1冊であった．一方，水族館や動物園の本は確実に1ケタ多い．

この影響は大きかった．天文月報の読者は，プラネタリウム施設の設置について相談をうける機会もあろうが，そのさい参考となる資料がなかったのである．もちろんこれは，設置・運営などの担当者にとっても同様である．情報があふれかえっている時代なのに，それぞれ効率悪く調査を行わなければならなかった．正しく要点を理解する前に設置作業がはじまることもあっただろう．大国とはいえないような情況だったのである．

本書は，ベテランのプラネタリウム担当者の手により，ようやく登場した解説書である．副題の通りプラネタリウムという機械の発達史が詳細に紹介されているほか，プラネタリウムに至る歴史が描かれているのも興味深い．海外の生の情報も随所に盛り込まれているが，これは著者の日頃の交流の成果だ．むろん，現在のプラネタリウム装置のレベルも一読すればわかるようになっている．具体的な製品名もあげられ資料性も高い．さらに，関連の組織や番組といったハード以外の話題も豊富だ．巻末のプラネタリウムリストも有用だろう．さらに本書がポピュラーサイエンスシリーズの一冊であり，比較的入手しやすいのも特筆できる．

かように画竜点睛な本書だが，固有名詞やテクニカルタームが多くやや読みにくい．そのため，読者を少々選ぶだろう．だがこれは資料性を重視したと見ればやむをえないとも思う．ならばいっそ現行のプラネタリウム機種の紹介などは1機種1ページをとってカタログブック的にしたらより特徴がでたかもしれない．さらに，現行機種の価格を掲載できればなお資料価値が高まっただろう．

ところで，本書の最終章は「プラネタリウムの現状と問題点」となっており，設置と運営について述べられている．この章は写真も図表もなく特に読みにくいのだが，著者の主張が強く現れていて迫力があり，おもしろい．ただ，この部分を読むと「日本のプラネタリウム運営はヒドイ」という印象が強く残ってしまう．それぞれに努力している部分にもふれてはいるが，良い具体例を出し，もっと積極的に評価をしてもよかったのではなかろうか？

なお，評者が本書で一番感動したのは「あとがき」である．ここにはSS 433の発見ドラマをあつかったカナダのプラネタリウム番組の見学記が書かれている．わずかな紹介だが著者の思いが素直に伝わりすばらしい番組であることがよくわかった．伊東氏にはプラネタリウム番組についての本も期待したい．

渡部義弥（大阪市立科学館）